

オンラインでは越えられない？

コロナ感染第7波の影響を受け、今年も青梅・羽村市の平和啓発事業^レ-メッセンジャー企画の広島行きは中止になりました。

しかし、今年度は7月の終わりまで広島に行くつもりで、実踏にも出向き、事前学習も進めてきていたので、何とかオンラインでやれることはやろうということに。

そこで、8月5日、私が画像を使いながら広島原爆資料館の展示内容を紹介した後、広島在住の児童作家、中澤晶子さんのお話、さらに旧広島二中2年生(当時13-14歳)であった3人の被爆者のお話、そして当日、一緒に平和公園や市内の被爆遺跡などを巡る予定だった広島女学院中による平和公園・碑めぐり、そして交流会をオンラインで行いました。

もちろん、オンラインの画面ごしでのやりとりには限界があることはわかっていたつもりなのですが… 午後、3人の方のお話を聞く、と言う場面で、途中で接続が途切れる、声が小さくて聞こえない、音量を上げるとハウって?聞き取りづらい… といったハード面でのトラブル、これも必ず起きます。

相手のお話を聞くだけならいいのです。中澤さんのお話などちゃんと聞ける。でも、その先に切り込めない。被爆体験の聞き取りでは、質問はあらかじめ考えておくよう指示はしたのですが、そこで出るのは「戦争中とその後ではアメリカに対する考え方は変わりましたか?」とか「広島が復興したのはいつごろですか?」など、大きく構えたというか、お客様のなものしか出ない、「当時の食べ物、遊び、学校生活…」など、当時の生活に迫るような質問は遠慮してしまうのか、こちらからふって何とか出る程度…

現地で対面していれば、もう少し越えられそうだし、またその場でダメでも、当日の夜のミーティングなどで、指摘して、翌日チャレンジすることも可能です。

やはり、どこか表面をなぞっている感は拭えないのです。

青梅の若手職員が「実地踏査で被爆した墓石を見ただけで、こんな重い石が爆風で持ち上がったのかなど実物を見ることで分かることもあるので、そこを伝えられないのが…」とメールに書いてきました。その通りなのです。オンラインでは、写真では伝わらない、大きさ、固さ…

また、写真で見たイメージとの違いがあれば、そこでわかり直しが起こるのです(私の話の中では原爆瓦◆を見せたりもしたけれど)

参加した子ども達の、ある種お行儀のよさ、お客様感覚を、どう突破させるか、はやはり現場で、実物を見て、表情や息づかいを感じながらお話を聞くことが、必要なんだと。

◆原爆瓦 瓦に塗られた釉薬が、原爆の熱線に当たった部分だけ泡立ち、ブツブツになっている瓦

